

ダイブクライ

作 長野 哲也

A / マツクマ エイタ
B / クサバ ヒオ
C / コガ シイヤ
D / アリヨシ マリコ

○舞台

作中の状況を表現できるのであれば特に制約はない。可能であれば、水の入った水槽―水槽の中にポンプとマイクが仕込まれており、遠隔のスイッチで起動して生の泡音を立てるもの―と、映像が投影できる幕や壁を用意できればよい。

0

2017年6月。

インタビュー映像。海を背景に座っている女性(ヒオ)の後ろ姿が映る。

ヒオ

(ボイスチェンジャーで声が変わっている)月曜日から土曜日まで、朝からスーパーで働いています。パートです。でもそれだけじゃ足りないのです、夜は家で文字入力の内職をしています……あんまりお金にならないですけど、子供も小さいからですね……今は祖父の家に住ませてもらっていて、仕事の時は面倒を見てくれるから……本当に助かってます。認可の保育園、どこもいっぱいいらしくて、だからまだ恵まれてるなって思います。中々子供と一緒にいてあげられない人もいるので……来年からは小学校です。子供はあつという間に成長しますね……ランドセルとか、服とか……もう少し給料がいい仕事、考えないと。祖父も祖母も高齢ですし、そろそろ住む家のことも……大変です、やっぱり……休みの日は疲れが抜けなくて、全然外に遊びに行けてないんです。こうやって海に来るのも久しぶりで……海、好きなんですよ。あの子。昔私が海の近くに住んで、でもその頃は……一時期一緒に住んでないことがあって、だからずっと海なんてないところで育ってきたはずなんですけど。お腹の中の時のこと、覚えてるのかな……(★声が元に戻る)あの、これカットとかしてもらえますかね。すごい、変なことまで話しちゃいそう(笑う)……あの子を産んだ後に、一人で育てられる自信なくて……いや、正直今もないんですけど。こんなこと誰にも言えないですよね……もうダメって思うこと、時々あるんですけど、その度に夢を見るんです……夢、はい。寝てる時に……ほら、四年前に、夏の初めと終わりに台風が来たじゃないですか。覚えてませんか……嵐が連れてきて、嵐が連れ去った、夏の夢。あはは、何言ってるんだろ……覚えてませんか

1 女が振り返る瞬間、映像が途切れる。

2013年6月半ば。

雨と風の入り混じる嵐の音と、台風接近のニュースが聞こえる。やがてうっすらと舞台上に光が差すと、波の音まで聞こえてくる。舞台上には3人のレインコートを着た人物。フードを深く被っており、顔は見えない。やがて一人がフードを脱ぐ。22歳のヒオ。

ヒオ

その日、午後には通過すると聞いていた台風4号は急に速度を緩めて、太陽が沈んだ後も私達の町からほんの数キロ離れた海の上に居座っていました。私の住む家は激しい波風に晒される海沿いの橋を通らないと帰ることの出来ない、いや帰れるんですけどすぐく遠回りになってしまふ場所であって、私は今更ながらこんな日に外出した自分の無計画さを恨んでいました、た

ヒオ、雨風の中を歩いていく。

ヒオ

差していた傘はとつくの昔に吹き飛んで、降ってきたんだか飛び散ったんだかはたまた海からやってきたのかわからない水の粒があらゆる方向から染み込んできます。途中コンビニで買ったレインコートも意味ないんです。もう内側もびしょびしょで……動きにくいから脱いじゃえばいいと思うんですけど、でも、脱がないのはなんでなのでしょう、ね

もう一人がレインコートのフードを脱ぐ。若い男、シイヤ。

シイヤは橋の欄干の上にはしゃがんで、海をのぞき込んでいる。

ヒオ

(気づいて)うわ、え……あの、

シイヤ

(振り返って)こんばんは

ヒオ

こんばんは……なにか、見えますか

シイヤ

(下を見て)泡が、見えます

ヒオ

泡、

シイヤ

あと、波とか

ヒオ

あー、波、

シイヤ

あれ……ちょっと待ってください、(海を覗き込む)

ヒオ

あ、はい

最後の一人(マックマ)は二人の様子を離れて見ている。

ヒオ

(待ちきれず)……あの、

シイヤ

おかしいなあ

ヒオ

危ないですよ、そこ

シイヤ

そうですね……その気だったんですけど

ヒオ

その気、ってそれは、

シイヤ

あ、その気ではないです

ヒオ

え、

シイヤ

その気ではない、その気です

ヒオ

その気ではないその気

シイヤ

はい。だからその気じゃないです

ヒオ

……少しこんがらがってます

シイヤ 台風ですからね

ヒオ あー、(こめかみを指で押さえる)

シイヤ (それを見て)頭痛ですか、

ヒオ ……ええ、まあ

シイヤ 一緒ですね。低気圧、昔から弱くて……もしかして、気分屋ですか、

ヒオ 気分屋……え、私ですか、

シイヤ はい

ヒオ どうでしょう。言われてみれば、そういうところも

シイヤ (聞かずに)僕はすごい気分屋で、こういう日に頭が痛くなると何も考えられなく

なって、もう考える前に走り出したくなるんです。でも実際走り出した瞬間に

「あれ、なんで俺走ってるんだろ」って思っただけで止まっちゃうんです。アホで

シイヤ ……そう、です

ヒオ まあそんなに急には止まらないんですけどね……うんと、橋の上を沿うように歩

く

ヒオ とりあえず、危ないのでこっちに、

シイヤ さっきはここから、一步踏み出したいと思っていて

ヒオ その気だったんですよ、

シイヤ 単純に、この場所から一步向こうへ……違う世界へ行ってみただけなん

ですけど

ヒオ その気だったんですよ、

シイヤ そこでね、あなたが……えっと

ヒオ ……クサバです

シイヤ クサバさん。何か、みえますか、って、僕に聞きました、聞きましたよね

ヒオ もうちよつと覚えてないです

シイヤ その時見えたんですよ……白い花が

ヒオ 花……泡じゃなくて

シイヤ 花のような泡です。真っ黒な海面にポコッと現れた泡が、街頭の光に照らされ

て、白い花が咲いたみたいだったんですよ(海を眺めて)……もう、散ってしまったん

ですかね

ヒオ ……なんか、ポエムですね

シイヤ え、

ヒオ ポエム、みたいですね

シイヤ (声を大きくして)何て言いました、

風の音が大きくなっている。

マツクマは携帯電話を二人に向けて、動画を撮り始める。

ヒオ

いや(声を張って)いやだから、ポエム、中学生が授業中にノートの端っこに書いてる、数年後見直したら顔真っ赤にしちゃうようなポエムみたいですね!

シイヤ　ああ……書いてんですか、
ヒオ　え、

シイヤ　あなたも、書いてたんですか、
ヒオ　……書いてないですよ……ごめんなさい書いてました……そんなことは、いいんです、何か悩んでるのであれば聞くので！

シイヤ　ありがとうございます。あのですね、
ヒオ　こっち、こっちで聞くので！

シイヤ　泡になりたいな、って
ヒオ　……はい、

シイヤ　さっき、そう思い直したんです……どうやったらなれますかね、泡
ヒオ　(頭痛がひどくなる)そんなこと……人魚にでもなればいいんじゃないですか、
シイヤ　人魚、

ヒオ　人魚は死んだら泡になるらしいですし……だから、ダメです、人間でしょ！
シイヤ　……じゃあ、人魚になるためには、

ヒオ　もういい加減にして！(シイヤに近づいて服の裾を掴む)
シイヤ　わ、

ヒオ　危ないって言うてるでしょ、からかってますよね！
シイヤ　ちよつと、危ない、

ヒオ　そんな所にいるから、もうこっちは頭痛いんです！
シイヤ　はい、僕もです

ヒオ　じゃあ早く帰りましょ！
シイヤ　でもこの嵐が過ぎてくれなきゃ、どこに行っただって頭は痛いままですよ

ヒオ　……あなたがそこを降りてくれたら多少は和らぐと思うんです
シイヤ　……え、じゃあ降ります
ヒオ　そうしてください

シイヤ　(降りようとして)……ちよつとだけ覗いてみてくださいませんか、
ヒオ　……あのね、

シイヤ　さっきの泡、とても綺麗だったんです
ヒオ　(観念して、橋の下を覗く)……わかんないです。色々うねっちゃってて、泡だか波

シイヤ　だか雨だか
ヒオ　(一緒に覗いて)そうですか……確かに見たんですけど……あの泡は、何の泡だったんでしょうね

ヒオ　知りませんよ。ほら、降りて、
シイヤ　もし僕が人間になった人魚なら、死ねば泡になるのかな、

ヒオ　え、
シイヤ　……なーんてね！

シイヤ　シイヤ、橋の上から飛び込む。

ヒオ　ちよつと(何が起こったかわからず)え、

マツクマ、録画を終え、携帯電話をズボンのポケットにしまった後、ヒオの隣にやってくる。

ヒオ (マツクマに気づき)あ、すいません、あの、人が……人が落ちちゃって……

マツクマ、レインコートのフードを脱ぐと、なぜか水泳用のゴーグルをかけている。海をのぞき込み、橋の欄干をまたいでそのまま海に飛び込む。

ヒオ ……あの、え、(海に向かって)大丈夫ですか……私ここにいていいですよね！……いやいやいや……(橋の欄干をまたごうとしてやめる)いやいやいや……

クスクスと笑う声。

ヒオは何か聞こえた気がして、辺りを見回すが誰もいない。

ヒオ 頭痛いよ……

嵐の音は一層大きくなり、舞台は暗転していく。

2

朝。穏やかな波の音とウミネコの声が遠くから聞こえる。

ヒオの住むアパート。ベッドでは薄い毛布をかけたシイヤが横になっている。その脇には椅子とテーブルがあり、ヒオが頭から大きなタオルを被り、机に突っ伏して寝ているようである。

ヒオ、唐突に大きなくしゃみ。

ヒオ (起きて、しかしタオルで前が見えない)あれ、

ヒオ、タオルを取ろうとするが、うまく取れない。

くしゃみで目が覚めたシイヤが体を起こし、タオルをとる。

ヒオ あ、どうも……あ、起きました、

シイヤ はい……朝、

ヒオ ええ、すっかり。大丈夫ですか、ケガとか……見た感じはなかったですけど、痛いところ(くしゃみ)痛いところか(くしゃみ)……ないですか、

シイヤ 大丈夫ですか、

ヒオ (タオルで鼻をこすって)私は、はい……あ、毛布そのままで

シイヤが自分の体を確認すると、パンツ一枚である。

ヒオ そのままだと風邪引いちゃうと思ったので……あ、パンツは、父のです。そういうの嫌でした、

シイヤ いえ……ありがとうございます。えっと、(周りを見る)

ヒオ (タオルを畳みながら)私の家です。ボロいアパートで申し訳ないですけど……痛いところ、ないですか

シイヤ (体を動かして)あー、全体的にちょっと

ヒオ (くしゃみ)

シイヤ 風邪ですか、

ヒオ いえ、ちょっとムズムズして……昨日濡れちゃったから、

シイヤ もしかして、飛び込んで、

ヒオ (にらみつけて)流石にそんな勇氣ないです

シイヤ すいません

ヒオ ……謝るくらいだったら、

シイヤ ……

ヒオ ……なんか、おとなしい

シイヤ え、

ヒオ 昨日のこと覚えてるよね、

シイヤ ええ、まあ

ヒオ 気分屋

シイヤ はい

ヒオ っていうより情緒不安定

シイヤ ……(外を見て)台風過ぎたんですね

ヒオ うん、綺麗に晴れてる……二十二より上、下、

シイヤ え、

ヒオ 年齢

シイヤ あ、下です。二十です

ヒオ やっぱり。年下じゃん。ハハ(笑う)

シイヤ ハハ(笑う)

ヒオ 起きたらね。一発、こう、ひっぱたいやろうと思ってたけど

シイヤ え、

ヒオ なんか、気が失せちゃった

シイヤ ああ(笑って)気分屋ですもんね

ヒオ、近づいてシイヤをヒンタする。

シイヤ あ、え、

ヒオ ほんとそうみたい。なんか着るものどってくるね

ヒオ、部屋を出て行く。波の音が静かに響く。

シイヤは立ち上がり、

シイヤ

自分の命に興味がない、というところ「じゃあなんで生きてるんだ」っていわれる。自分でもそう思う。何か命がヤバい目に会いそうになったところで、僕はきつとそれを避けようとはしないだろうし。でも運よく、ここまでそんなヤバい目に出会ったことはない……あ、いや、気づいてないだけかもしれない。どんな時も日常とヤバいことは隣合わせだ

ヒオ

(戻ってきて)昨日は十分ヤバかったから

シイヤ

……それもそうです

ヒオ、地味な長袖のシャツとズボンを持っており、シイヤに渡す。

シイヤ

(持ってきた服に着替えながら)「欲しいものはその執着を手放すと、向こうから勝手に入ってくる」なんてインターネットの端っこに書かれていたけど、半分は当たっていると思う。欲しいものは、それがどうでもいいと思っている人の方にコロコロ転がっていく。僕がこうやってまだのうと生きているのがその証拠だ

ヒオ

どゆこと、

シイヤ

例えば電車に飛び込みたいとは思わないけど、誰かにお願いされたら飛び込んでやってもいいかなとは思っちゃう、みたいな

シイヤが話している間に、テーブルの上には朝食としてトーストされた食パンが用意されている。二人はベッドに座る。

ヒオ

ふーん、(食パンをかじる)

シイヤ

あ、いや、やっぱり今のなしで

ヒオ

え、

シイヤ

どうせ飛び込むなら、地球に衝突する隕石とか、侵略してきた宇宙人の母船とか……そういうのがいいですよ

ヒオ

急に壮大な話になるね

シイヤ

そう考えると、何に飛び込むかで命の価値って変わっちゃうのかもしれないね……ほら、電車は、止まったら恨まれるじゃないですか。学生とか、働いている人とかに

ヒオ

じゃあ、海に飛び込むのはどういう位置付けなの、

シイヤ

んー、そうだなあ……

ヒオ

……興味ないとか言ってた割に、死んだ後のこと考えるんだ

シイヤ

そこはほら、後のことには責任とれないですから

ヒオ

気分屋のくせに

シイヤ

(頬に手を当てて)あれは低気圧のせいだ、

ヒオ

気分が橋から飛び込むくせに

シイヤ

すいませんって

ヒオ

なーんてね

シイヤ
え、
ヒオ 　　ってなに。意味わかんない
シイヤ 　　……照れ隠しです
ヒオ 　　ポエム読むから
シイヤ 　　頭痛かったんですよ。頭痛いと読みません、ポエム
ヒオ 　　読まない。ほら、ごはん食べて
シイヤ 　　……いただきます

シイヤ、食パンを食べ始める。

ヒオ 　　それ、駅前にあるパン屋さんの
シイヤ 　　(頷く)
ヒオ 　　おいしいでしょ
シイヤ 　　(頷く)
ヒオ 　　なんであんなとこいたの、
シイヤ 　　(パンを口に含んだまま)前住んでた時よく通ったので懐かしいなと思って
ヒオ 　　(途中で遮り)あー喋らない！住んでたのね、前ね
シイヤ 　　(頷く)
ヒオ 　　誰かに会いに来たの、知り合いとか
シイヤ 　　(首を傾げた後、横に振る)
ヒオ 　　そっか
シイヤ 　　……
ヒオ 　　……おっばい
シイヤ 　　(口が止まる)
ヒオ 　　……男の人の死にたいって、おっばい揉みたいと同じことだって聞いたよ
シイヤ 　　(慌てて飲み込んで)それ誰が言ったんですか
ヒオ 　　覚えてないけど。コガくんはどうなの、
シイヤ 　　どうなのって、
ヒオ 　　揉みたいの、やっぱり
シイヤ 　　死にたい訳じゃないですからね
ヒオ 　　ふーん(自分の胸を触る)
シイヤ 　　……
ヒオ 　　……ダメだからね
シイヤ 　　何も言っていないです……ごちそうさまでした(食器を持って)これ、どこに片づけ
れば、
ヒオ 　　(持っている食器を取り上げ)いい、いい。やっとくから……もう少し寝たら、まだ
シイヤ 　　ちよっとあれみたいだし、
ヒオ 　　いや悪いですよ、お世話になりっぱなしは
シイヤ 　　いまさら何言ってるの

ヒオはシイヤをベッドに寝かせる。

ヒオ はい

シイヤ でも

ヒオ 深呼吸して

シイヤ (深く息を吸うとあくびがでる) ああ……やっぱりちょっとあれですね……すいませ
ん……

ヒオ でしょ。おやすみ……(出て行くうとして) 通りすがりの人がね、助けてくれたの。
あなたのこと

シイヤ それは、ありがたいなあ……

ヒオ 知り合い、いないの、

シイヤ いないです、そんなの(と目を閉じる)

ヒオ、シイヤが寝たのを確認し、食器を持って去る。

大きな波が岩礁にぶつかり弾ける。

とあるホテルの一室。

ゴーグルをかけたままのマツクマがいる。

マツクマ

未だに夜になると止めどなく涙があふれてくる。人が一生で流す涙の量は大体
60リットルらしいけど、こども毎日どばどば出ているところをみるとそろそろ
涙腺も枯れ果てるんじゃないかと心配になってきた。でもそんな心配そっちのけ
で涙は一向に止まる気配がない……このペースで、じゃあ死ぬまで涙を流すとす
るとそれこそ涙のプールなんてできてしまうかも……(携帯を取り出して調べる) 25
mプール一杯分、およそ、36万リットル。流石に桁が違った。まあでも、お風
呂一杯分、200リットルくらいは流れるんじゃないだろうか……涙風呂。これ
がいたいけな少女の涙ならちよつとは需要もあるのだろうが、三十路男の、涙風
呂。誰も入りたくない。間違いない。だから貸し切りだ。ぎぶん。あー、生ぬる
い(手ですくって飲む)あー、しょっぱい。自分が流した涙を飲むと、自分から流れ
た何かは返ってくるんだらうか……みたいなことを考えていると、いつの間にか
朝が来ていつの間にか涙も止まっている

あくびを一つするマツクマ。

洗面所へ移動すると、洗面器には水が貯めてある。

ゴーグルをとって、溜まった涙を流し、そのまま顔を付け、息を吐く。

ポコポコと音がする。

マツクマ

(顔を上げて水を拭き)涙が出ている間は眠れない。カーテンから覗く朝日がい
つ
も俺のおやすみの合図だ……あ、時間

着信音が響く。マツクマ、電話に出る。
電話の相手は代行屋。

マツクマ はい、マツクマです

代行屋 おはようございます、定期連絡です

マツクマ お疲れ様です。えーと、進捗ありますよ

代行屋 おお

マツクマ 一月に受けていた281番の件、マルタイの名前と住所わかりました。今日中にメール送ります。顔写真も一緒に。282、283番はまだ側調中です……あ、アルバムありがとうございます

代行屋 いえいえ……仕事が早くて助かります

マツクマ あー、ですすね、少しの間進捗滞るかもしれませんが……しばらく張り込むので

代行屋 ……見つけられましたか

マツクマ ええ、情報提供ありがとうございます

代行屋 それはよかったです。長かったですもんね……どうされるんですか、お手伝いしますよ

マツクマ いえいえそんな、後はこちらでやります

代行屋 させてくださいよ。長い付き合いじゃないですか。あなたが探すプロなら、こちらもその道のプロです……きっちり追い込みますよ

マツクマ いや本当に……自分で、やりますから

代行屋 お気持ちはわかりますが……こういうのは手順があるんですよ

マツクマ わかっていきますよ

代行屋 当事者だと感情が先走って、うまく実行できなかったり、もしくは取り返しのつかないことになったり

マツクマ 大丈夫、大丈夫です。ちゃんとできますから

代行屋 ……そうですか……何かあれば、いつでも言ってください

マツクマ ええ、ありがとうございます

代行屋 では、また

マツクマ、電話を切る。

マツクマ ……お前さ、何考えてたんだ、

マツクマがゴーグルをつけると、あの日の風がリフレインする。

シイヤと、レインコート姿のヒオ。

再びあの夜のやりとりが断片的に始まる。

ヒオ なにか、見えますか

シイヤ 泡が、見えます

ヒオ 泡、

マツクマ あの日もこんな嵐だった……あの日もこんな嵐だったか、

シイヤ おかしいなあ

ヒオ ……すこし、こんがらがっています

シイヤ 気分屋ですか、

マツクマ お前、何考えてたんだ、七年。俺のこと覚えてるか、

ヒオ どうでしょう。言われてみれば、そういうところも

シイヤ まあそんなに急には止まらないんですけどね……うん

マツクマ 俺は、覚えてるよ

ヒオ もうちよっと覚えてないです

シイヤ 泡になりたいな、って

ヒオ 人魚にでもなればいいんじゃないですか

マツクマ お前は……マリコのこと、どう思ってた、

シイヤ もし僕が人間になった人魚なら、死ねば泡になるのかな

ヒオ え、

シイヤ ……なーんてね！

シイヤ、飛び込む。着水音とともに嵐が遠のく。